

市民の命を守る

14病院院長によるアンチエイジングシンポジウム

大規模災害が発生したらどうする？

寝屋川市では3年前から毎年、市立保健福祉センターで災害時医療訓練が行われている。市と医療関係機関との協働事業であり、弊紙でも「府下初の災害時医療訓練」として大きく取り上げた(第296号一面記事)が、医療人がチームワークを組み、*トリアージュに取り進む様子には、「市民の命を守る」という気迫を感じ取れた。聞けば、市内の医療法人がすべて参加して協力しているという。競合・反目しても不思議ではない病院間での連携は、他に例を見ないものだ。この背景には、一般社団法人寝屋川市病院協会の長年にわたる絆と歴史がある。

寝屋川市病院協会とは

1974年、親睦を重ねていた市内の病院が、年末年始の急病患者に対応するために連携し、寝屋川市病院協会が設立された。7年前、一般社団法人格となり、保健衛生分野での重責を担うなど、活動は進化を遂げている。所属病院は、上山病院、大阪病院、河北病院、関西医大香里病院、



寝屋川市病院協会会長尾会長

小松病院、星光病院、青樹会病院、道仁病院、寝屋川生野病院、寝屋川ひかり病院、寝屋川南病院、藤本病院、松島病院、ねや川サナトリウム(50音順)。

14病院が毎月一回、多岐にわたる議事内容を討議し、行政への周知伝達、枚方寝屋川消防本部との意見交換などを行う。会議場所は病院を回り持ちで開催するので、各病院の特徴や専門分野を理解することも意味がある。「あの病院のあの先生」と顔の見える関係が生まれる。こういったオープンマインドな交流が地域を守る一つの医療機関のように機能する。病々連携となり、地域の人たちの健康を見守っていく。(一社)寝屋川市病院協会の存在意義は大

40周年を記念して

「健康!ねやがわ」開催

初代の藤本哲雄先生(藤本病院)から、松島磐雄先生(松島病院)、石山憲勝彦先生(青樹会病院)が歴任後、現在は、長尾喜一郎先生(ねや川サナトリウム)が会の会長を務めている。先月、開催された40周年記念イベントで



シンポジウム司会の長尾会長

長尾会長は、昨年から運用が始まったドクターカーや365日24時間の救急体制に触れながら「寝屋川市のために医療、保健、福祉の連携を進めていく」と決意を述べた。北川法夫市長は「地域医療の充実・発展に尽力されてきた」と、(一社)寝屋川市病院協会の活動を高く評価。「高齢社会ではなく長寿社会」と「健康!ねやがわ」の意を祝辞に託した。

※限られた人的・物的資源の状況下で、最大多数の傷病者に最善の医療を施すために傷病者の緊急度と重症度により、治療優先順位を決めること